

音韻特性から見た「数」に係わる接辞と 量詞の機能対立

平成 27 年 5 月 7 日受付

中 川 千枝子*

要 旨

中国語の「数」に係わる二つの接辞“們”と“第”はともに使用頻度の極めて高い語彙項目であるが、その機能については、おびただしい考察がある接尾辞“們”でさえ諸説入りまじり定説がない一方で、接頭辞“第”についてはほとんど議論されていない現状がある。本稿では、軽読の接尾辞群の機能対立の中で“們”が文法的接尾辞に属することを実証した後に、数詞「1」の変調規則を基準にして、基数詞、序数詞、そして個数詞の3カテゴリーの対立を実証する。あわせて、形態分析における音韻手段の優先性を証明する。

キーワード：接尾辞“們”，接頭辞“第”，数詞「1」，軽読，変調

1. はじめに

中国語の接辞“們”と“第”は高頻度単語のトップ 100 語にはいり、「数」を表す点で両者は共通している。これまでの接辞研究を見ると、接尾辞“們”に関する文献はすこぶる多いのに対して、接頭辞“第”を取り上げた研究はほとんどない。また、よく議論される接尾辞“們”であるが、「数」の文法範疇の中で確固とした位置づけが与えられている訳でもない。

本稿では、まず数詞を始め「数」に係わる接辞の使用状況を、各種の言語統計結果をもとに概観する。その上で、接尾辞“們”を取り上げて、先人の議論の問題点を整理する。つぎに、接頭辞“第”を取り上げて、数詞「1」の変調規則が基数詞、序数詞と個数を表す数量詞（以下、本稿では個数詞と呼ぶ）との間の明示的な標示として機能している事実を実証する。あわせて、中国語の形態分析において、音韻手段が軽視されてきた背景をさぐり、数詞「1」の変調規則が「数」の文法範疇では、数詞「2」の語形選択規則に優先している事実を指摘する。

2. 数詞と「数」に係わる接辞の使用頻度

各種の言語統計結果から、「数」に係わる語が使用頻度の上位を占めている実態がはっきりと見て取れる。数詞はもとより、接辞“們”と“第”が上位にあがっている。

* 京都産業大学外国語学部

2.1 常用字

小中高の国語の教科書をコーパスにした常用字と常用語の調査¹⁾と、それをも含んだ180万字のコーパスの調査結果²⁾を利用して、漢字の使用頻度上位10字を見ると、以下の通りである。

表1 小中高の国語の教科書 漢字頻度表

順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
漢字	的	一	了	是	我	不	在	人	們	有

表2 180万字コーパス 漢字頻度表

順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
漢字	的	一	了	是	不	我	在	有	人	這

“們”第12位

2.2 漢字の造語力

漢字の造語能力からみたランクは、使用頻度とは趣を異にしている。まず、180万字コーパスの結果を見ると、使用頻度で上位10字に含まれていなかった漢字七字(子, 大, 心, 頭, 氣, 無, 水)が上位に位置している。注目されるのは、使用頻度でも造語力でも上位を占めている漢字三字(不, 人, 一)の中に、数詞“一”がランクインしている事実である。

表3 180万字コーパス 漢字造語力分析

順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
漢字	子	不	大	心	人	一	頭	氣	無	水

小中高の国語の教科書をコーパスにした統計では、さらに踏み込んだ調査結果を発表している。表1の使用頻度上位10字の造語力について、同時に実施した常用語上位1000語の構造に着目して、単音節語を構成するのか、多音節語の先頭・語中・語末のどの位置に現れるのかをリストにしている。

表4 小中高の国語の教科書 漢字の造語力と位置との関係

順位	漢字	組合せ数	単音節語	多音節語		
				先頭	語中	語末
1	的	3	1			2
2	一	16	2	14		
3	了	3	2			1
4	我	2	1	1		
5	是	9	1			8
6	在	6	3			3

7	不	6	1	5		
8	們	9	1			8
9	人	12	1	5		6
10	有	8	1	4		3

これから判ることは、数詞“一”と否定詞“不”は、単独で語となる外、多音節語の先頭に生起するため、勢い変調が発生している実態である。逆に、漢字の“們”は単独で接尾辞となるほか、多音節語の末尾に生起するため、常に轻声で発音されるという音韻特性である。

2.3 メディアの用字用語調査の結果

2005年以來、国家語言資源監測・研究センターが毎年実施している『新聞、ラジオテレビ、インターネット用字用語調査』³⁾では、単語を自動分節機で処理している。その特徴は、2音節語の範囲を大幅に拡大して、高頻度語句に使用されている漢字の使用頻度を測定している点である。

表5 新聞・ラジオテレビ・ネット高頻度語句用字表

順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
漢字	人	大	不	一	出	中	上	国	会	年

180万字のコーパスの漢字造語能力との共通点は、“人”“大”“不”“一”の4字が、新聞でも上位4字としてランクインしている点である。変調をとまなう否定詞“不”と数詞“一”が高頻度語句の構成に使用されている実態は、形態研究における音韻分析の必要性を支持する事象であるといえる。

3. 軽読する接尾辞“們”と接尾辞群の機能対立

3.1 接尾辞“們”の先行研究

接辞研究の中では、“們”に関する学術論文の多さと肩を並べる語彙項目はないと言っても過言ではない。それほど“們”の先行研究が多い背景には、比較的新しい用法であって、漢語本来の語ではなく、征服王朝である元朝の時代にモンゴル語との言語接触の中で、漢語に次第に浸透してきた由来⁴⁾が大いに関係している。

CHAO1968では、名詞接尾辞の一つで、複数接尾辞と称される“們”に音声上三種類の軽読形式⁵⁾があると指摘している(-men, -me, -m)。

CHAO1968の丁邦新の翻訳では、複数の語尾(‘詞尾’) ⁶⁾と記述している。

《新華字典》第10版2004も、語尾(‘詞尾’) ⁷⁾で、人の複数を表すと記述。

《八百詞》1980では、接尾辞で代名詞や人名詞の後ろに用いて、多数を表す⁸⁾と記述している。

朱德熙1982では後置成分(‘后加成分’) ⁹⁾をともなった合成語(人們, 孩子們, 同学们)はすべて集合名詞であると説明している。

表 6

	複数	多数	集合名詞
接尾辞	CHAO1968	《八百詞》1980	
語尾	丁邦新翻訳 2002 《新華字典》2004		
後置成分			朱德熙 1982

3.2 接尾辞の機能対立

一つの単語の語尾にいくつかの接尾辞がつく現象がみられる。

- (1) 希望读者们多多指正，不胜感激。(CHAO1968 の丁邦新訳の序文)

読者の方々の大いなる指摘は感激に絶えず，希望します。

- (2) 科学家们

科学者たち

- (3) 我诚恳地希望我的前辈，老师们和同学们提出宝贵意见，以期教学相长，裨补阙漏。(呂香雲 1985 の後記)

私は先輩や先生方それに同学たちから貴重な意見が寄せられることを心から望んでおります。

それによって教学の質が向上し間違いを埋めたく思います。

語形成の接尾辞“者”や“家”は語根に近く配置され，文法的接尾辞である“們”は最後尾に付加される。PACKARD2000 では中国語の単語のタイプを 4 種類¹⁰⁾ に分類することを提案している。

複合語＝二つの語根から成る語。例えば，“马路”など。

拘束形態素語根語＝語根／拘束形態素語根＋拘束形態素語根。例えば，“电脑”“出版”など。

派生語＝拘束形態素語根／語根＋語形成接尾辞。例えば，“房子”“电化”など。

文法的単語＝語＋文法的接尾辞。例えば，“走了”“我们”“走不进”“进得出”など。

文法的接尾辞が語の後ろに付加される点を指摘して，文法的に内部屈折をおこした語形式を区別した点が新しい。

3.3 接尾辞“們”の機能

大河内 1997 に興味深い例¹¹⁾ が紹介されている。

- (4) 有几个年轻娃们

接尾辞“們”が概数詞“几个”と共起している例である。接尾辞“們”の文法的意味を考える上で，これは重要である。日本語の例と対照させてみよう。

- (5) a. 三人の学生

b. *三人の学生たち

- (6) a. 数人の学生

b. 数人の学生たちに手伝ってもらった。

特定の数を指定された名詞に「たち」は共起しないが、不特定の数の名詞には「たち」は共起できる。例(6)bは、既知の学生の不特定多数という意味である。中川1985では、総括の範囲副詞“都”の先行詞の分析から、特定複数(三人の学生)と不特定複数(多くの人々)を区別し、不特定複数は類の和集合の意味を表す¹²⁾と結論している。

4. 接頭辞“第”と数詞「1」の変調

4.1 序数詞の認定

各種言語統計での接頭辞“第”の単語としての処理方法には、大きな違いがみられる。1980年代後半に北京語言学院語言教学研究所が実施した『現代漢語頻率詞典』(1986年出版)では、数詞を含む2音節単語の中に、“第一”“第二”“第三”などは含まれていなかった。接頭辞“第”と数詞“一”“二”“三”とに分節されていた。一方、2005年以来毎年実施されている国家語言資源監測・研究センターの『新聞、ラジオテレビ、インターネット用字用語調査』では、2音節単語の範囲を大幅に拡大してコーパスを分節している。例えば、“一箇”“一些”“一点”“一下”;“這箇”“這些”“這種”“這次”“這麼”;“其中”“有些”“之一”などとともに、“第一”“第二”“第三”“第四”も語として分節し序数詞として位置づけられ、基数詞と区別するようになっている。

4.2 数詞「1」の変調の有無から見た2種類の構造

2音節語の“第一”と“一箇”であるが、この二つの“一”は読み方が異なる。もっと正確に言うと、異なる声調で読まれる。前者は第一声(陰平)のyīであり、後者は変調して第二声(陽平)のyíとなる。原因はその位置にある。2音節語の語末に位置する“一”は変調せずに基本の第一声をたもっている。2音節語の先頭に位置する“一”は後続の量詞“箇”の声調が第四声(去声)であるために、第二声(陽平)に変調する規則がある。両者は構造の上で異なるだけでなく、「数」のカテゴリーの上でも対立している。前者は序数を表し、後者は物の数(個数)を表している。数詞「2」の場合には、序数と個数の対立は語形の選択となって標示される。すなわち、序数は“二”を用い、一般量詞の前では“兩”を用いて、“第二”と“兩箇”と表示する¹³⁾。語形選択は発音の違いをとまなう。

数詞「2」における“二”と“兩”の語形選択は周知の事実である。ところが、同じ文法範疇でありながら、数詞「1」における変調の有無¹⁴⁾については、ほとんど記述される事がないのである。

4.3 接頭辞“第”と構造

接頭辞“第”の機能に関する先行研究は、接尾辞“們”のような錯綜はなく、順序を表す点で一致している。

CHAO1968 序数をつくる接頭辞。

《八百詞》1980 整数の前に加えて、順序をあらわす。

『白水社』2002 接頭辞。数量詞の前、時には一部の量詞や名詞の前に用いて序数を示す。

このうち、「数量詞の前に」用いるとの記述は、その構造分析に誤りがある。その理由は次の例を使って説明しよう。

(7) “二把刀”这个词组有两个分析法；

- (一) 作“用第二把刀的人”讲，就是离心的，
- (二) 要是认为“刀”比喻“厨师”，就是向心的。

哪一个看法好，就得看这个词组的成分在现在讨论的语类里出现的频率。

因为“刀”字很少指人，所以第一个看法就比较好。

(中国話的文法，丁邦新訳 373 頁)

“二把刀”というフレーズには二つの分析法がある。

- (一) “ナンバーツの包丁を使う人”という意味で，外心構造。
- (二) もし“刀”を“コック”の比喻とみなすならば，内心構造。

どちらの見方がよいかは，このフレーズの成分が今議論している品詞の中に出現する頻度次第である。

“刀”という字が人を表すことはほとんど無いので，第一の見方が妥当である。

例 (7) の中には 4 個の数量構造 (两个分析法，第二把刀，哪一个看法，第一个看法) が出現している。接頭辞“第”を含む数量構造では，まず“第”と数詞“二”“一”とが結合して序数詞“第二”“第一”を構成した後に，量詞“把”“个”と結び付き，その上で名詞“刀”“看法”と結びついた左枝分かれ構造である。もう一方の“哪一个看法”では，まず数詞“一”と量詞“个”が結び付き，個数を表す個数詞“一个”を構成した後に，前にある疑問指示詞“哪”と結び付いた右枝分かれ構造が，名詞“看法”を限定している。

<u>序数</u>	<u>個数</u>
[[第 A] B]	[哪 [AB]]
[[第二] 把] 刀	[哪 [一个]] 看法
[[第一] 个] 看法	[两个] 分析法

接頭辞“第”は数詞 (あるいは整数) の前に用いて序数詞を構成したのちに，序数詞が量詞と結合して名詞を限定するため，数詞「1」には変調は発生しないのである。一方，指示詞“这”“那”や名詞“头”“最后”は数量詞の前につくため，数詞「1」は変調を引き起す¹⁵⁾のである。両者の構造の違いは，日本語の「東京駅」(2:1)と「新東京」(1:2)の構造の違いと同類である。

4.4 数詞「1」の変調規則から見た「数」の3カテゴリー

4.4.1 基数

数詞「1」は基本の声調である第一声 (陰平) で発音する。

(8) 昨天的篮球比赛我们班赢了，可是足球比赛1比2输了。

(速成漢語テキスト②: 23 頁)

きのうのバスケットの試合は私達のクラスが勝った，しかしサッカーの試合は一对二で負けた。

4.4.2 序数

数詞「1」の前に接頭辞“第”を加えて、数詞「1」は基本の声調である第一声（陰平）で発音する。

(9) 因为你是第一个不问价钱就接受我帮助的人。(速成漢語テキスト③：247頁)

と言うのは、あなたが値段を尋ねずに私の援助を受け入れてくれた最初の人だからです。

(10) uai uei 为中响三合元音，第一与第三个元音轻而短。

(速成漢語テキスト①：247頁)

uai uei は真ん中が響く三重母音であり，第一と第三の母音は軽くかつ短い。

例(10)では，序数詞“第一”と“第三”の並列構造全体が，量詞“个”と結び付き，名詞“元音”を限定している。

序数

[[[第 A1] 与 [第 A2]] B]

[[[第一] 与 [第三]] 个] 元音

4.4.3 個数

数詞「1」は変調する。後に続く量詞の声調が第四声（去声）の場合は第二声（陽平）で発音し，それ以外の第一，第二，第三声の場合は第四声（去声）に発音する。

(11) 食堂门口新贴出两个通知，一个是太极拳学习班招生通知，一个是汉字书法学习班通知。(速成漢語テキスト②：245頁)

食堂の入口に二つのお知らせが新たに張り出された，一つは太極拳学習班のお知らせ，一つは漢字書道学習班のお知らせである。

4.5 接頭辞“第”の機能

PACKARD2000では接頭辞“第”を語形成接辞¹⁶⁾と規定して，“非”“可”“未”“無”“再”などの接頭辞と同類に分類している。しかし，「数」の文法範疇に係わる接頭辞“第”は，接尾辞“們”同様に文法的接辞であり，序数詞“第一”は彼の言う所の「文法的単語」である。“第”以外にも，“第”と同じ位置に生起して序数を表示する接頭辞として，以下のような語彙項目がある。

旧暦の一ヶ月の最初の十日：初一，初二，初三，……，初十

人の長幼を表す：老大，老二，老三，……

名詞が接頭辞と同様の機能をはたしている場合もある。

曜日：星期一，星期二，星期三，…，星期日／天

曜日：礼拜一，礼拜二，礼拜三，…，礼拜日

人の長幼を表す：孔／張／李／趙大……

孔／張／李／趙二……

孔／張／李／趙三，……

書籍の巻号：巻一，巻二，巻三，……

4.6 量詞による序数標示

数詞「1」の後ろに置いて序数を表示する量詞¹⁷⁾として、以下のような語彙項目がある。

番号順や西暦の日付：一号，二号，三号……

人の長幼を表す：大姐／哥，二姐／哥，三姐／哥，……

建物の番号や階：一楼，二楼，三楼，……

道路のルート：一環，二環，三環，四環，五環

バスの路線：331路，……

組織の番号：一年級，二年級，三年級，……

一班，二班，三班，四班，……

一中（“第一中学”の省略）

等級を表す：一流（“第一流”），二流，三流，四流，

4.7 接頭辞“第”の使用制限

《速成漢語③》によると、偶然性事実の序数標示には接頭辞“第”を用いて、恒常的事実である暦や人の長幼には独自の伝統的な序数標示が存在するという。さらに、接頭辞“第”を用いても用いなくてもよいのは、事物の序数と組織の序数であり、書面語や改まったスピーチの際にのみ“第”が使用される¹⁸⁾としている。例えば、“第五中学”、“第三研究室”は書面語であり、日常の会話では“五中”や“三室”と省略形で序数を表している。

5. おわりに

形態の研究に、音韻変化の考察は不可欠である。接辞の添加や重畳形式は分節の形態素が加わるだけでなく、それぞれに固有の音韻変化をとともなう事が少なくない。超分節の形態素である高低アクセント（声調）や強弱アクセント（重読と軽読）の変化が同時に発生している場合がしばしばである。しかし、先行研究の中には、文法手段としての音韻変化に言及し明確な位置づけを与えている者は極めて少ない。例えば、ロシア語の形態変化を踏まえた呂香雲 1985 では、中国語の語彙 - 文法手段¹⁹⁾として最も主要なものは虚詞と語順であると位置づけた上で、そのほかに、停頓と重読、重畳、拘束形態素、内部屈折、兒化（r化、または卷舌韻尾）、轻声（“了”“着”“過”がアスペクト標示である時は軽読する）、フレーズ化（“的”字フレーズ、方位フレーズ、比喻フレーズ、介詞 - 方位フレーズ）をあげている。このうち、音韻手段に属するのは停頓と重読、兒化、轻声の4種類であり、変調が含まれていない。KAISSE1985では、統語論と音韻論の相互作用の例として、現代中国語の変調を取り上げているが、示された例はすべて連続三声の変調現象²⁰⁾である。変調の中でも数詞「1」の変調規則は、その重要さの割には注目度が低い。その主たる原因は、辞典編纂などの発音標記において変調

は標示しない²¹⁾ のが一般的であるからである。

中国語の「数」の文法範疇を研究するのであれば、当然の事ながら、数詞「1」に触れるはずであり、そこでの変調の実態を調査するのもまた当然の事であろう。実際、数詞「1」の変調は不可欠の標示であり、数詞「2」の語形選択（“二”と“兩”の使い分け）に優先して機能している。ただ、変調現象は気付かれにくい。第一に、漢字表記の中国語では変調を標示できないため、文字資料からは変調現象は読み取れない。音声資料、とりわけ口語の音声コーパスに接することでしか変調の実態は観察できないのである。第二に、聴覚は個人差が大きい領域で、微妙な声調の差異を聞き分けるには、それ相応の注意深さが要求される。その中から、特定の現象を音韻変化として抽出するには、これまたそれ相応のコーパスの聞き込みがベースとして蓄積されている必要がある。

中国語学では、統語論に関連する音韻現象については多くの言及がなされてきたが、形態論に関してはそもそも「中国語は形態変化が乏しい」という前提のもとで、形態研究自体が目目されることが少ない現状が存在する。加えて、文字資料重視の研究風土の中で、形態変化としての音韻手段の重要性を認識している先人は稀である。本稿では、「数」のカテゴリーという視点から、数詞「1」の変調規則が最優先形態手段であることを実証した。従来の漢字資料重視の研究では、数詞「2」の語形選択が唯一の形態手段であると強調されてきたが、実際には、変調という音韻手段に次ぐ二次的手段である事を実証した。今後の形態研究の進展の中で、中国語の形態変化における音韻手段の優先性をさらに明確にして、「中国語無形態変化論」の偏見を打破する必要がある。

〈注〉

- 1) 十年制の小中高で1978-1980年に出版された国語の教科書全20冊で使用されていた漢字はのべ520,934字、単語はのべ374,654語である。
- 2) 4分野（社会科学、自然科学、日常会話、文学作品）から選んだ179種のコーパスで使用されていた漢字はのべ1,808,114字、単語は374,654語である。
- 3) 2005年の調査で使用した15種類の新聞で使用されていた漢字はのべ425,789,961字、13テレビ局と8ラジオ局の文字と有声コーパスで使用されていた漢字はのべ25,845,303字、ネット上のサイトの記事で使用されていた漢字はのべ280,507,746字である。
- 4) 例えば、孫錫信1990の論考などによる。
- 5) CHAO1968:244頁。
- 6) 丁邦新訳2002:730頁。
- 7) 《新華字典》第10版2004:330頁。
- 8) 《八百詞》1980:342頁。
- 9) 朱德熙1982:42頁。
- 10) PACKARD2000:81頁。
- 11) 大河内康憲1997:84頁。
- 12) 中川千枝子1985:142頁～。
- 13) 《八百詞》1980:326 - 327頁。
- 14) 《八百詞》1980:526 - 527頁の数詞“一”の項目に、変調に関する記述はない。

- 15) CHAO1968 : 218 頁には“頭一” is always bound, whereas “第一” is free. との記述があるが, 数詞“一”の変調に関する言及がなく, 両者の構造の違いには気付いておらず, 序数の接頭辞“第”と, 個数の数量詞を修飾する名詞“頭”の機能の相違を見逃している。
- 16) PACKARD2000 : 174 頁。
- 17) 《八百詞》1980 : 8 - 9 頁の量詞の種類の中に, 自主量詞という種類を設けている。
- 18) 《速成漢語初級教程 総合課本③》2002 : 128 - 130 頁。
- 19) 呂香雲 1985 : 274 - 279 頁。
- 20) KAISSE1985 : 170 - 178 頁。
- 21) 符淮青 2004 : 249 - 250 頁。

〈参照文献〉

- 伊地智善繼編 2002. 『白水社中国語辞典』東京：白水社。
- 中川千枝子 1985. 「漢語副詞“都”の文脈分析及び語気分析」, 『京都産業大学論集』人文科学系列第 14 卷第 3 号 1985 : 136 - 153 頁。
- 大河内康憲 1997. 「中国語の人称名詞と“們”」, 『中国語の諸相』: 75 - 85 頁, 東京：白帝社。
- 大河内康憲 2001. 「[日]と[天]と[号]」, 『現代中国語研究』: 1 - 9 頁, 京都：朋友書店。
- 符淮青 1985. 《現代漢語詞匯》, 《現代漢語詞匯》(增訂本) 2004, 北京：北京大學出版社。
- 呂叔湘 1990. < 积您, 俺, 咱, 咱, 附论们字 >, 《呂叔湘文集》第二卷漢語語法論文集 1990 : 1-37 頁。北京：商務印書館。
- 呂叔湘主編 1980. 《現代漢語八百詞》, 《現代漢語八百詞》(增訂本) 1999, 北京：商務印書館。
- 呂香雲著 計永佑校訂 1985. 《現代漢語語法學方法》。北京：書目文獻出版社。
- 孫錫信 1990. < 元代指物名詞后加“們(每)”的由来 >, 《中國語文》1990 第 4 期 : 302-303 頁。
- 朱德熙 1982. 《語法講義》。北京：商務印書館。
- Chao, Yuan Ren 1968. *A Grammar of Spoken Chinese*. University of California Press.
- Kaisse, Ellen M. 1985 *Connected Speech : The Interaction of Syntax and Phonology*. London : academic Press.
- Packard, Jerome L. 2000. 构词法 *The morphology of Chinese : A Linguistic and Cognitive Approach*. London : Cambridge University Press.

〈依拠資料〉

- 北京語言學院語言教學研究所編 1985. 《常用字和常用詞》。北京：北京語言學院出版社。
- 北京語言學院語言教學研究所編 1986. 《現代漢語頻率詞典》。北京：北京語言學院出版社。
- 常寶儒 1989. < 現代漢語頻率詞典的研制 >, 陳原主編《現代漢語定量分析》1989 : 30-59 頁。
- 馮志偉 1989. 《現代漢字和計算機》。北京：北京大學出版社。
- 國家語言資源監測與研究中心 2006. < 報紙, 廣播電視, 網絡用字用詞調查 >, 《中國語言生活狀況報告》2006 : 003-016 頁。北京：商務印書館。

Morphophonological Analysis of Chinese Number Expressions with Affixes and Classifiers

Chieko NAKAGAWA

Abstract

This paper aims to demonstrate the three categories of Chinese number expressions based on the tone sandhi of numeral “yi” (1). This paper provides a compact discussion of the linguistic nature of Chinese affixes focused on two items “-men” and “di-”. It shows that Chinese has a set of morphophonological system for its number category.

Keywords : suffix “-men”, prefix “di-”, numeral “1”, neutral tone, tone sandhi

